

客冬閑吟抄

島田修三



そんなわけで、彼女の死を知らされた時、ぼくは6922本めの煙草を吸っていた（村上春樹）
死者のほか知己なき通夜の席にをり身内のはしやげる五、六人^なが見ゆ

私は栄養といっしょに思い出で体重がふえている（開高 健）

鼻にかかる Bobby Vinton の曲ながれ遠く聴きつつ輪菓子屋に在り

私の心は、私の自由になるような、私に見通しの利くようなやくざな実在ではない（小林秀雄）

わいだめもなき移ろひに秋来らしセイシン激昂おほよそ治まる

われわれには手がない／われわれには死に触れるべき手がない（田村隆一）

神おとろへ俺の見てゐるヌカルミは絵具まみれのルオーなる泥濘ヌカルミ

嘘も隠しもなく、長年のあいだ、わたしはヒトラーを電信会社の社員だと思っていた（W・アレン）

野菜喰へ野菜喰へとぞ総統アドルフは口やかましかりきと気味わろし奴らは

健康とは、満足せる豚。眠たげなポチ（太宰 治）

百鬼園の『搔痒記』ふたたび読み了へて俺を去らざる愉悦にぞゐる

今宵は仲秋名月／初恋を偲ぶ夜／われら万障くりあわせ／よしの屋で独り酒をのむ（井伏鱒二）

何となく夕陽のしづみし刻ときも遣り長ながし夜をひとりかも飲む

思えば幼い頃の宿題は易しかった／人生の宿題の／重たさに比べたら（茨木のり子）

溪流のさやぎのやうなるもろごゑに舗道をひしめき少女ら思春期

宗教心がなくても、安心して暮らしていけるのは、今の世の学者先生ばかりである（折口信夫）

れうれうと切なく不吉に鳴くらしも産女鳴かなむ時雨の夜となる

なんておまえは淋しそうなんだろう。おまえはまるで、生きている者と死んだ者の中間にいるみたいだよ（桐山 雙）

坂口のやがて縊られ逝きぬべしニコチンまみれに俺はも秋越ゆ

じつにきみのあしあととは昏いではないか／きみのせおっている風景は苛酷ではないか（吉本隆明）

抒情とは断じて縁なき激情に週余をのたうつ須可捨焉可、歌なぞ

戦争のような危険な事業においては、善良な心情から生じる謬見こそ最悪のものだ（K・V・クラウゼヴィッツ）

梅干にタネある自明当然是不慮にし噛めばタネはもあらがふ

彼女は彼を負かす現実そのものの化身だった。彼にはそういう気がした。彼は負けるのにきまっていた。（山川方夫）

ラドクリフを二番で卒へたる淑媛と紹介されしが淫らや口もと

彼は人生の基本をスポーツから学んでいるから、どんな時でも現実に対して強くてしなやかだった（吉本ばなな）

自転車もつひに漕げざりし漱石の癩癩無器用まことに分かる

十年という歳月は夢を見ている間の長さにも似ているし、夢を見てしまった後のはかなさにも似ている（永井龍男）

山茶花の白咲きみつるさ庭べを童女と見て過ぐ喪の幕も見ゆ

弱か犬は吠えるちゅうけん囃。ベスのごと黙って喧嘩せん奴あ、したら強かとばん（戸川幸夫）

言ひ分のある面つきと見てをればこれの柴犬なみだぐむかな

「おまえ、学校の準備できてる？」僕は肩をすくめた。そんなものができている子がいるだろうか？（S・キング）

遊び惚け五センチ背丈ののびてゐし夏あり緑のさざめく記憶に

外は雪がふる冬の晩だというのに、私がよむのはいつも夏の本ばかり……（阿部 昭）

夕べよりそぞろ心の果てもなくわが耶輪陀羅は包丁研ぎある

人間なんて 誰も／決まった死に場所さえ／知らされてないのだから（吉野 弘）

寒雲の縹はなだに染まりゆく時をさしづめ俺は酒房に落ち着く

いづれは消える夢だから／夏のをはりは秋だから（三好達治）

まなかひを足のろ馬の日暮れ馬さびしく過ぎりおもむろに酔ふ

人間の身体を見ていて神々しいと思ったのは、一ぺん沈んで浮かんで来た水葬体だね（藤原新也）

昏昏と雪ふりしきる午後ひとりホオジロ鮫のグラビア見てをり

ああ、この東京の、この二十七歳のおれの世界に、湿った雪が間断なく降りつづけるよ（中上健次）

夕べより雪とはなるべし立つ春の雨はも冷た^{つべ}凍たれやまず

江分利家は、ほんとに楽じゃない。それに江分利は「飲む」のである（山口 瞳）

雲を剪りひらく月下の屋台にて口を灼きつつチクワブ啖らふも

最初はたいてい実を結ばないものだ。大いに希望があるつもりでいるとがっかりさせられる（R・チャンドラー）

寡黙なるメグレ警部の淋しさを或る日は支へに俺は励むかな

拒否された傷に託して抒情する者には「成熟」などはない（江藤 淳）

立つ瀬なき寄る辺なき日のお父さんは二丁目角の書肆にこそをれ

ならば彼女が死神だったとしても、そんな時どうして死神の声はそんなに優しいのだろうか（石原慎太郎）

これの世をよぎる淋しき風としてビリー・ホリデイかすれつつ聞こゆ

やけっぱち騒ぎは のどがかれるよね／心の中ではどしゃ降りみたい（中島みゆき）

つづまりは人は独りで死にゆくと思へば沁みて一杯白波

シエヘラザードへ。鳥肌よりもみじめな一夜分のわたしの歴史を（富永太郎）

夜の更けを「お転婆娘」聴く俺の滂沱と涙かゆ涙かせておかむ

彼女はまぶしそうな、すこしはずかしそうな顔をして、「一緒に帰りましょう」といった（沢野ひとし）

なよたけの美少女乗せてボロ自転車こぐ瘦せぎすは俺の倅ぞ

ひそかに僕は自分自身にたえる／きょうも遅れて勤めに行く自分自身にたえる（黒田三郎）

酔ひしれて厨に水を灌みぬたれ四旬といふは渴ける齡ぞ